『ことばの科学』 2016 年 12 月，第 30 号，21-37.

「在」および「有」構文による空間表現の統語構造[1]

張 婧禕[2]
玉岡 賀津雄[3]

DOI: 10.18999/stul.30.21

要約：文型習得の初期段階の日本人中国語学習者は、存在を表す中国語の「在」と「有」構文についての区別ができず、誤用が頻繁にみられる。場所を表す名詞にはトコロ性をもつ名詞、モノ的な名詞と両方の性質を兼備する名詞がある（荒川，1992）。モノ的名詞に方位詞（中国語では、方位を表す名詞は「方位詞」と呼ばれる。）を付ければ、トコロ化が可能になり、空間表現として表せる。しかし、中国語の空間表現における方位詞を正しく使用するのは、日本人中国語学習者にとって難しいようである。特に、初級学習者による「在」と「有」構文の産出において、方位詞の脱落現象が特徴的である。したがって、初級日本人学習者がこれらの誤用を産出する原因を明らかにし、文型習得における適切な対応策を探るために、本稿では、第１に、中国語の「在」および「有」構文について、統語構造上の区別と中国語の方位詞の使用の有無について、両構文における本質的な違いを解明する。第２に、日中両言語上の方位詞の使い分けについて、日中両言語における空間表現に関する特性がどう異なっているかを考察し、「在」と「有」の両構文が示す意味を再分類する。

キーワード：「在」構文　「有」構文　空間表現　方位詞　初級日本人中国語学習者

---

[1] Syntactic structure of sentences with *zai* and *you* verbs for locational expressions

[2] Jingyi Zhang; E-mail: star_zhangjy@yahoo.co.jp

[3] Katsuo Tamaoka; E-mail: tamaoka@nagoya-u.jp

1. はじめに

中国語における 「在」と「有」を動詞とする構文では、「存在」「出現」または「領属」の意を表す。「在」構文とは、動詞の「在」を使って、「物/人＋在＋場所」という構造を取る文であり、「有」構文とは、動詞の「有」を使って、「場所＋有＋物/人」のような構造を取る文である。これらの文を統語構造からみると、「在」構文は、主語が「物/人」を表す名詞句、「場所」を表す名詞句で、動詞の「在」の後に続く。「在」構文は、主語の位置にある「物/人」が、ある「場所」に存在することを意味する。それに対し、黄（1997）によると、「有」構文は、「場所」を表す名詞（後置詞句）を主題とし、「物/人」を表す名詞句が動詞「有」の対象となるとしている。「有」構文では、主題の位置にある「場所」は、対象の「物」を所有する意味を表すことができる。つまり、「在」構文の主語は「物/人」であり、ある「場所」での存在を示しており、主語の所在を表す。それに対して、「有」構文は、「場所」が主題であり、「物/人」を表す名詞句は対象であるとして、主題が対象に対して所有することを意味すると考える。

「在」と「有」の構文は、外国語として中国語を学習する人達にとって、重要な初級レベルの文型である。しかし、「在」と「有」の構文は、中国語の教科書によって異なる説明がされている。たとえば、初級者向けの教科書である『スリーステップで学ぶ中国語―文型から会話へ―』（張新力, 2015, p. 27, 46）では、「在」構文は「存在文」とするが、「有」構文は「存在文」および「所持」の両方の意味を表す表現として記述されている。また、別の初級者用教科書である『1冊めの中国語―会話クラス―』および『1冊めの中国語―講読クラス―』（劉頴・喜多山幸子・松田かの子, 2008, 両教科書ともに p. 33）、『（最新版）1年生のコミュニケーション中国語』（劉頴, 2016, p. 29, 33）では、「在」構文は所在を表し、「有」構文は所有を表すという説明をしている。このように「在」と「有」構文の説明に揺れがあるため、文型習得の初期段階の日本人中国語学習者にとっては、両者についての区別ができず、誤用が頻繁にみられる。そこで、本稿では、第１に、中国語の「在」および「有」構文について、統語構造上の区別と中国語の方位詞の使用の有無について、両構文における本質的な違いを解明する。それを基に、第２に、日中両言語上の方位詞の使い分けについて、日中両言語における空間表現に関する性質がどう異なっているかを考察し、「在」と「有」の両構文の示す意味を再分類する。さらに、これらの２点の考察に基づき、初級日本人学習者のための文型の教授・学習への示唆を提供する。

2.「有」と「在」構文の統語構造について

「有」と「在」構文は、いずれも存在を表す文である。しかし、丁他（1979）は、「有」構文は「在」構文の倒置した構造ではなく、なおかつ両者が統語上で表す意味は同じではないと指摘している。佟は、「在」構文は「あるモノや人があるトコロに存在する」（1986: p. 130）を表す文型であり、その文型における「トコロ」とは「方位詞」または「方位構造」を取るフレーズで表さなくてはならないと説明している。同様に、黄（1997）も、「在」は「存在」を表す動詞であり、物体の空間位置を表しものの、「方位」の素性を持ち、方位関係（本稿では、以下、表現の便宜上、方位関係と空間関係を「空間関係」に統一した。）を表すと述べている。しかし、「有」構文においては、必ずしも方位詞を要求されない。「有」は、英語の have のように「所有」の意味を持つため、空間および領属関係を表す（黄, 1997）のではないかと考えられる。このような空間および領属関係については、以下の（1）と（2）の「有」構文を用いて、説明する。

（1）海里有鱼。（海には魚がいる。）
（2）老师那里有很多书。（先生のところにはたくさんの本がある。）

（1）と（2）の文においては、「有」の後にくる「鱼」（魚）や「书」（本）などのような名詞は、所有を表す「有」動詞の補部（complement）に名詞がきて、動詞句を作る。その意味で、これらの名詞は、所有される対象となる。それに対して、文頭にくる後置詞句（PP: post-positional phrase）は、（1）の場合は、場所を表す名詞の「海」と後置詞（P: post-position）である方位詞の「里」（日本語の「中」に相当）の結合により、「海の中」という後置詞句（[$_{PP}$ N (海) P(里)]）を作る。同様に、（2）の場合は、人を表す名詞の「老师」（先生）と後置詞の「那里」（日本語の「ところ」に相当）が結合して、「老师那里」（先生のところ）となり後置詞句（[$_{PP}$ N (老师) P(那里)]）を作る。これらの（1）と（2）は、場所状語[4]と呼ばれている。したがって、「有」構文に包含される構造は、「在」構文より複雑であり、黄（1997）が説明するように、「有」構文は、空間と領属関係の両方を同時に持つ文型である。

仮に、通常の中国語の正順語順である主語–動詞–目的語（SVO）の場合は、（3）の

[4] 中国語の文法において、状語（adverbial）とは述語の前にきて、述語を修飾または限定するものである。時間、場所、条件、方式などを表す状語がある。

ようになる。

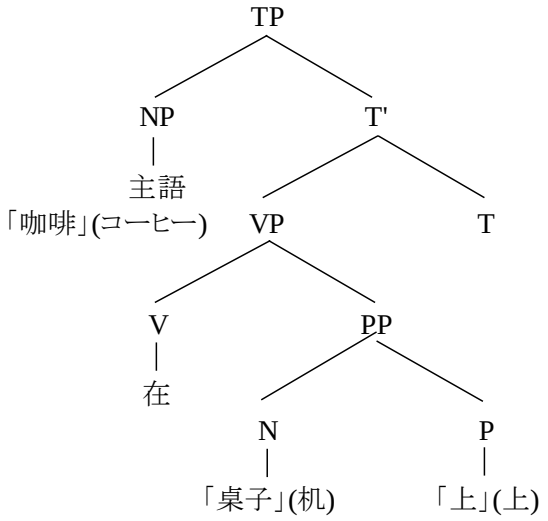
(3) 老师有很多书。（先生はたくさんの本を持つ。）

文 (3) においては、「老师」（先生）の主語が、動詞の「有」に対して修飾関係を持たず、純粋な「領属」関係を表したものである。つまり、単純に主語の「先生」が、「本」を所有し、その「本」が主語の「先生」に属すものを示す。したがって、「有」構文は動詞の前に来る句のトコロ性によって、空間関係を表すのか、領属関係を表すのか区別されることになる。

一方、「在」は自動詞であり、場所を示す後置詞句は、動詞の補部（complement）である。

(4) 咖啡在桌子上。（コーヒーは机の上にあります。）

(4) の文では、無生の名詞の「咖啡」（コーヒー）が主語であり、存在を示す自動詞の「在」がくる。それに対して、名詞と後置詞あるいは方位詞で構成される後置詞句「桌子上」（机の上）が、動詞の補部として結合 [$_{VP}$ V (在) [$_{PP}$ N (桌子) P (上)]] される。したがって、(4) の文の構造は、図 1 にようになる。

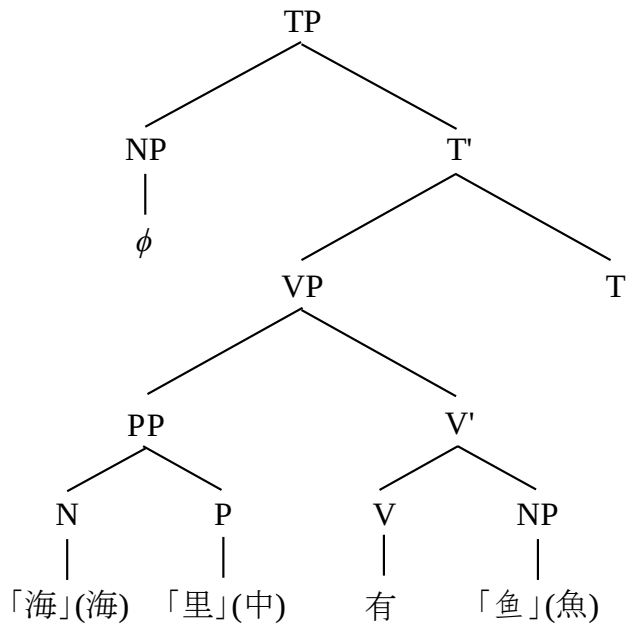


[$_{TP}$ NP (咖啡) [$_{T'}$ [$_{VP}$ V (在) [$_{PP}$ N (桌子) P (上)]] T]]

咖啡在桌子上。（コーヒーは机の上にあります。）

図1 「在」構文による句構造

一方、黄（1997）は、「有」の前に来るのは状語と指摘し、場所を表すもので、動詞「有」の後にくる名詞は、「有」が所有する対象であり、目的語であるとした。そして、黄（1997）は、動詞「有」の前にくる名詞句を、「有」構文における主題と呼んでいる。しかし、「有」構文の（1）では、「海里」（海の中）は、後置詞句（PP）と考えることができる。具体的には、名詞の「海」には後置詞の「里」がつき、それが主要部は後置詞で格を付与すると考えることができる。そう考えると、主語は省略されており、empty pro（ϕ）であると想定される。そして、「有」構文の（1）の統語構造は、図２のように描くことができる。この構造では、黄（1997）が主張する主題という考え方は取らない。



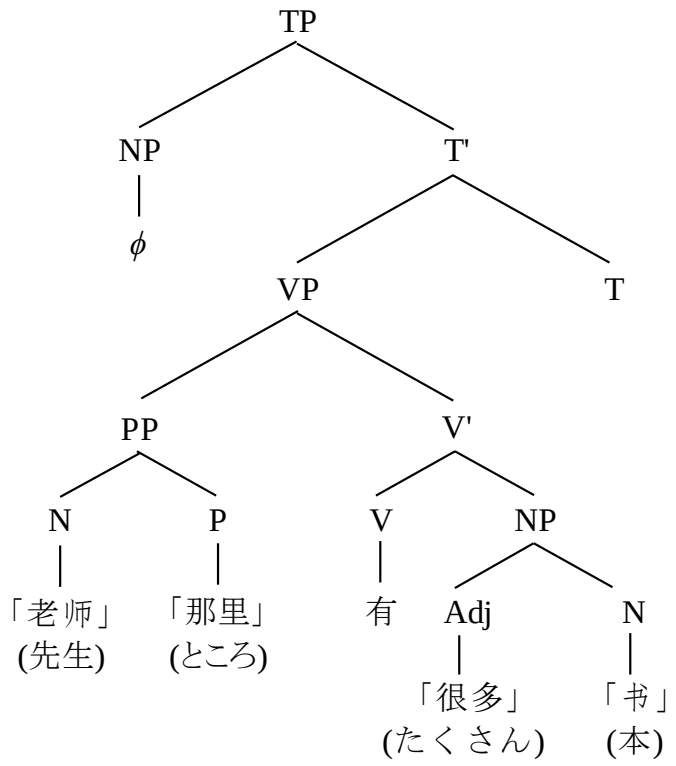
[$_{TP}$ ϕ [$_{T'}$ [$_{VP}$ [$_{PP}$ N (海) P(里)] [$_{V'}$ V (有) N (鱼)]] T]]。

海里有鱼。（海には魚がいます。）

図2 「有」構文（1）の統語構造

同様に、「老师那里」（先生のところ）の句では、後置詞の「那里」があるので、後置詞句（PP）と考えることができる。やはり、主語は省略されており、empty pro（ϕ）であると想定される。そして、「有」構文の（2）の統語構造は、図３のように描くことができる。図３では、「很多书」があり、これは形容詞の「很多」と名詞の「书」で構成されて、「多くの本」という意味を示す名詞句[$_{NP}$ Adj (很多) N(书)]（Adj は形容詞）

である。この名詞句は、動詞「有」の補部であり、目的語である。



[$_{TP}$ ϕ [$_{T'}$ [$_{VP}$ [$_{PP}$ N (老师) P (那里)] [$_{V'}$ V (有) [$_{NP}$ Adj (很多) N(书)]]] T]]。

老师那里有很多书。（先生のところにはたくさんの本があります。）

図3 「有」構文（2）の統語構造

「在」構文の図１と「有」構文の図２および図３を比較して、中国語の「有」と「在」構文の統語構造の違いを考察する。まず、「在」は自動詞であり、「有」は他動詞である。図1で示したように「在」構文では、主語に「咖啡」（コーヒー）を取るが、自動詞であるため目的語に相当する名詞句は無く、動詞「在」の補部として後置詞句「桌子上」（机の上）と結合している。そのため「在」構文は、図１に示したように、主語の名詞句、動詞の「在」、後置詞句という非常に一般的な[$_{TP}$ NP (咖啡) [$_{T'}$ [$_{VP}$ V (在) [$_{PP}$ N (桌子) P (上)]] T]]という統語構造を取る文であると言えよう。そこで、動詞句（VP）内の動詞「在」は自動詞であるため、目的語は取らず、後置詞句は補部に来て、そこには方位または空間を示す句が来る。図４に示した統語構造の VP から分かるように、「在」は空間属性を示す動詞であり、VP が示す内容は、主語の NP の空間属性である。したがって、

「在」動詞は、主語の「珈琲」の空間属性を示し、具体的には、「桌子上」という空間を示す後置詞句がくる。これにより、「在」構文は、主語の「珈琲」が、空間的にどこにあるかを示す文となる。

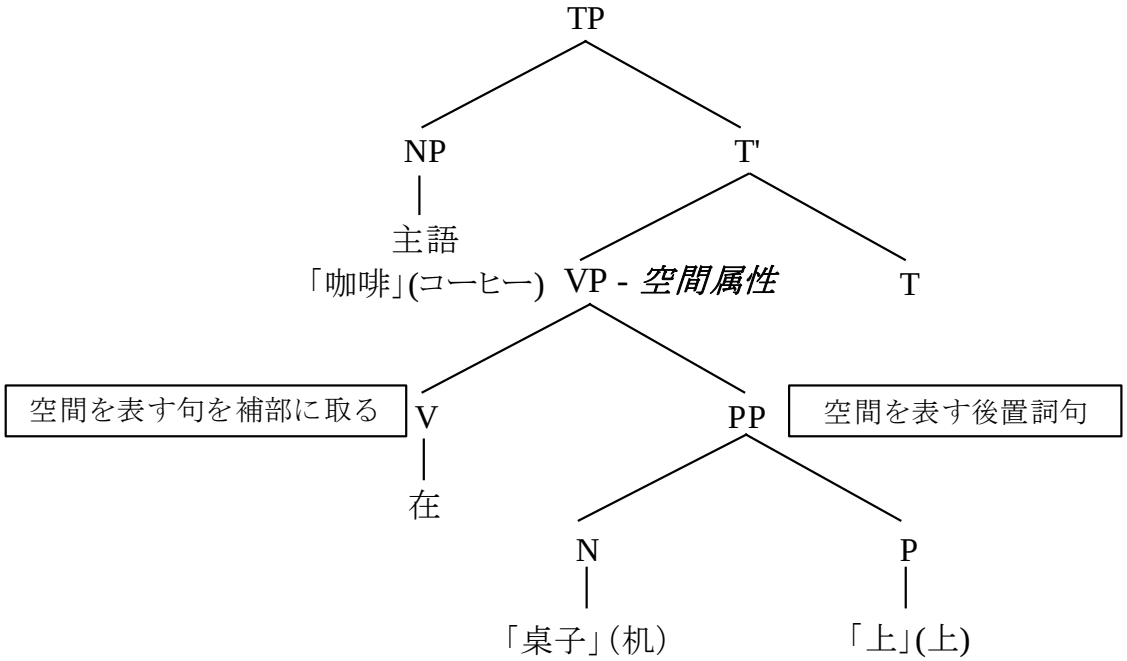


図4 「在」構文が表す空間属性

一方、「有」は他動詞なので、本来なら主語と目的語の句を要求する。しかし、図２と図３から分かるように、文頭に後置詞句が来ている。「有」構文の（1）の「海里有鱼」（海には魚がいます）の場合、この後置詞句の「海里」が文頭に来ている。この後置詞句を文末に置くと、＊[$_{TP}$ ϕ [$_{T'}$ [$_{VP}$ V (有) [$_{V'}$ N (鱼) [$_{PP}$ N (海) P(里)]]] T]]となり、動詞「有」に統御される位置のV'内に後置詞句（PP）が置かれる。しかし、動詞「有」は、所有を示しており、後置詞句を所有することはできないので、非文となる。もちろん「海の中にいる魚」という意味で「在海里的」と名詞の「鱼」を修飾する関係節を作ることは可能であろうが、これは単文ではないので、ここでは考慮しない。

結果的に「在」構文では、後置詞句が文頭に来ることになり、黄(1997)は、この後置詞句を主題と呼んだ。しかし、「有」構文は、むしろ TP の指定部に空主語（ϕ）があると想定することで、主語を定めることができる。そうすれば、図２と図３で描いたように、後置詞句は動詞句内にあると想定することができる。後置詞句は、動詞「有」

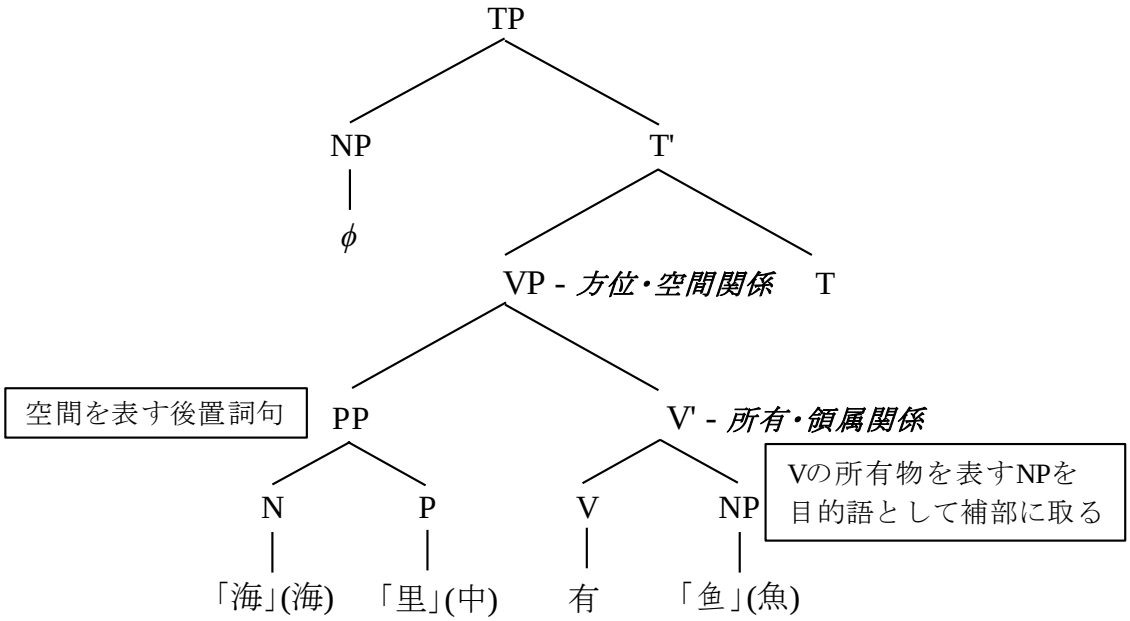


図5 「有」構文（1）が表す空間・領属関係

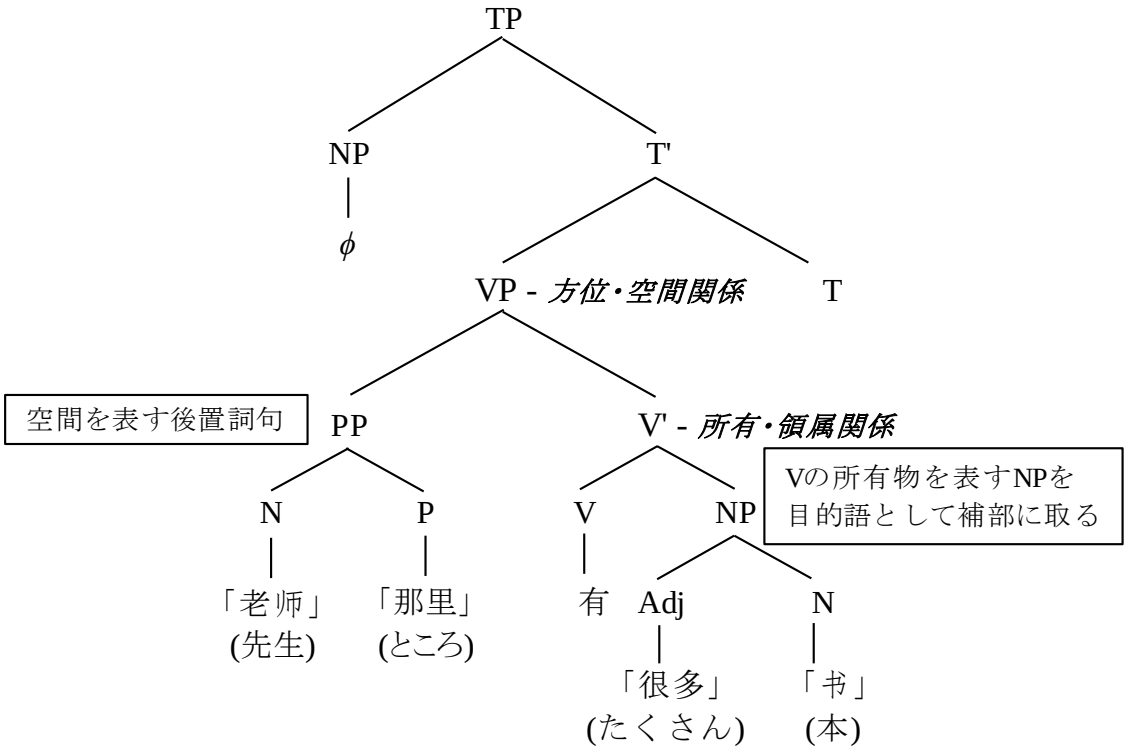


図6 「有」構文（2）が表す空間・領属関係

の作用域の外に位置するので、動詞「有」に支配されることはない。しかし、V'の構成素として、動詞「有」と目的語を含むことができ、動詞「有」は、主語と目的語を持つ他動詞として位置づけることができる。したがって、「有」構文は、図５と図６に示したように、後置詞句、動詞「有」、目的語の名詞句という $[_{TP}\phi\,[_{T'}\,[_{VP}\,[_{PP}\,N\,P]\,[_{V'}\,V\,N\,]\,]\,T]\,]$ のような統語構造を取る文となる。この「有」構文の VP 内では、後置詞句は動詞の「有」と V'内の NP を統御する。これにより、図５のように、空間属性を示す PP と所有・領属関係を示す V'に分けて考えることができる。また、V'内では、動詞「有」が補部の位置に目的語の NP を要求し、所有・領属の意味を表す。仮に、後置詞句の「老师那里」（先生のところ）に、方位詞の「那里」（ところ）がなく、「老师」（先生）のみであれば、「老师」が主語になり、「很多书」（多くの本）の所有を示すことになる。方位詞を伴う後置詞句（PP）と所有（V'）の両者は、一つの動詞句（VP）として結合される。つまり、PP は、V'と独立して、空間属性を示す。そのため、名詞が方位詞を伴うことによって作られる後置詞句が先行することで、「有」構文は、所有だけではなく、存在をも示すことになる。

3. 誤用からみた日中場所表現における方位詞使用の差異

これまで説明したように、「在」構文と「有」構文の後置詞句（PP）は方位詞を伴い、空間関係を表す。存在を表す日本語と中国語の表現には、次のような違いがある。

(5) 桌子上有一本书。
(6) 机の上に一冊の本がある。

中国語の表現では、(5)のように、無生名詞である「桌子」（机）の後に「上」、「里」、「下」などのような方位を表す名詞（方位詞）を付けて、名詞の「书」（本）の場所を表現する。同様に、(6)のように日本語でも、「ある」という動詞を使って、「一冊の本」の存在する場所を「机の上」として表現することができる。

(7) * 桌子有一本书。
(8) 机に一冊の本がある。

方位詞の「上」を使わない（7）は非文であり、正しい中国語ではない。中国語では、場所を示すためには、無生名詞の後に方位詞を置かなくては、空間・方位属性が示されない。一方、中国語に対応する日本語の文の（8）では、方位名詞を使わず、無生名詞の「机に」だけで表現しているが、それでも日本語では正しい文となる。

（6）と（8）は正しい日本文であるが、完全に同じ意味を表すものではないと言われている。荒川（1992）は、「机の上にある」で表現するのは、机の最も上部の場所を指すが、「机にある」で表現するのは机の引き出しなど、机という具象物に属する内部のところにあるという意味上の違いを指摘した。つまり、（8）の文では、机の上にあっても、机の引き出しの中にあっても良いことになる。この言語事象については、日本語の空間表現における方位詞の使用は無標（unmarked）であるのに対して、中国語は有標（marked）である（荒川，1992；2004；方，2004）。方位詞の使用の有無と関係して、「在」と「有」構文が日本語母語話者にと習得し難くいと予想される。したがって、次の節では、日中両言語における空間または場所表現における特徴的な違いを、日中両言語を対照しながら、説明する。

4．日本語の空間を表す名詞の「トコロ性」と中国語の空間名詞の「トコロ化」

朱（1999）は、中国語の体詞[5]のうち場所詞（「処所詞」）と方位詞を取り上げて議論している。朱（1999）によると、場所詞のうち、（1）「上海」、「中国」などの「地名」、（2）「学校」、「郵便局」などの「場所とみなす機関名詞」、および（3）「上面」、「当中」などの「合成方位詞」、という3つに分類した。一方、方位詞については、中国語では単純方位詞と合成方位詞に分けられる（方，2004；朱，1999）。単純方位詞は、「上」、「下」、「左」などのように、単純な語で方位を表せるものであり、すべて付属型式で表現される（朱，1999；2000）。したがって、このような方位詞は単独で場所を表すことができず、それ自体で後置詞句を作ることはない。それに対応し、合成方位詞は、「上面」、「下面」、「左边」などのように、単純に方位を表せる語に接尾辞である「面」や「边」などを付けたものである。方（2004）によると、合成方位詞は単純方位詞より、トコロ性が強いと指摘している。つまり、ほかの名詞と結び付けて表現することもできるが、単独で場所を表すこともできる。本稿では、初級中国語の

[5]体詞とは、副詞で修飾できない品詞類の総称である。文中では、主語、目的語などの文法的役割を担う。体詞には名詞、場所詞、方位詞、時間詞、区別詞、数詞、量詞および代詞の一部が含まれる（朱，2000）。

文型習得における「名詞＋方位詞」の形を取る後置詞句（PP）を議論の対象としているので、単純方位詞についてのみ検討する。

語には、「語彙的な意味」をもつものと「文法的な意味」をもつものがある（鈴木, 1972）。膠着語としての日本語に存在する格助詞は、後者の文法的な役割を担う語である。楊・布施（2005）は、日本語では、中国語のように場所詞がなくても、格助詞を用いて場所や空間を表すことができると説明している。日本語の名詞には場所を表す語彙的機能があり、それに「に」や「で」などの文法的な意味を担う格助詞を付けることで、空間や場所を表現することができる。中国語には、格助詞のような機能を持つ語がないため、方位詞を付けて場所詞としなくてはならない（楊・布施, 2005）。同様に、陳（2014）は、言語類型論の観点から、日本語は膠着語であるため、語の後ろに付く格によって、トコロとしての意味を示すことができるが、中国語は格を持たない孤立語であるため、語の後ろに方位詞を付けてトコロ化にするという操作が必須であると指摘している。

方（2004）は、日本語の名詞に「に」格がつく場合は、動作などを成り立たたせるために必要とするものを表し、名詞に「で」格がつく場合は、動作などが成立する場所を表すと指摘している。これは、多くの中国語の空間表現が、この日本語の名詞に「に」格を付ける場合と対応するとした。しかし、日中両言語における「方位詞」の使用の有無の違いについてははっきりと区別していない。たとえば、次のような文である。

(9)　壁に一枚の絵が掛かっている。
(10)　＊ 壁の上に一枚の絵が掛かっている。

方（2004）は、(9)の文であれば、名詞の「壁」に「に」を付けて、場所の意味を持たせて、なおかつ「壁」に「掛かる」行為を行うことを実現するために、「に」格が必要であるとしている。このような文では、場所を表す名詞または「岸」や「壁」などのモノ名詞などに「に」を付けて、空間表現を作ることができる。しかし、(10)の文のように、「上」という方位詞を付けると非文になる。一方、中国語では、「岸」「墻壁」などの名詞は、そのままでは場所を表せない。そのため、「上」などの方位詞と一緒に使わなくては、意味をなさない。要するに、空間的な意味が希薄な名詞に対して、中国語では「名詞＋方位詞」の形でトコロ化を行うと言えよう。

5.「在」構文の後置詞句（PP）における方位詞使用の分岐

「在」構文は後置詞句の方位詞で、空間属性を表すと説明した。しかし、以下のような方位詞が使われない「在」構文もある。

（11）我在上海。（私は上海にいる。）
（12）*我在上海里。（*私は上海の中にいる。）
（13）我在酒店。（私はホテルにいる。）
（14）我在酒店里。（私はホテルの中にいる。）

これらの文は、場所を表す名詞についての朱（1999）の3種分類の内の2つに当てはまる。まず、（11）とその非文である（12）の「上海」は地名であり、場所表現を表す際に、（11）のように地名を表す固有名詞に対して方位詞を使用しない。つまり、後置詞句を構成する要素である名詞（N）は地名を表す固有名詞の場合には、方位詞（P）を付加しなくても後置詞句になり、空間を表現することができる。逆に、方位詞を付けると（12）のように非文になってしまう。

一方、（13）と（14）の「酒店」（ホテル）は、場所を示す機関名詞である。（13）のように場所の意味を含む機関名詞は、方位詞と組み合さなくても使えるが、（14）のように方位詞と共に使用することもできる。しかし、場所の機関名詞の場合は、方位詞の使用と方位詞の非使用において、若干の意味の違いがある。方位詞を使わない（13）の文では、「我」（私）が存在する空間を表す。しかし、方位詞を使用した（14）では、「在」という行為を行う具体的な空間的な位置を表す。つまり、行為を行う範囲の観点から考えれば、方位詞使用の（14）のほうが方位詞非使用の（13）よりも、動詞「在」をより限定していると考えられる。

6.「有」構文における方位詞の使用の有無による2分化

中国語教育の現場で使用されている教科書においては、劉・喜多山・松田（2008）『1冊めの中国語―会話クラス―』（p. 33）、劉・喜多山・松田（2008）『1冊めの中国語―講読クラス―』（p. 33）および劉（2016）『（最新版）1年生のコミュニケーション中国語』（p. 33）のテキストには、「有」構文は「所有」を表すことが説明されている。しかし、趙（2011）は「有」構文の意味について、「場所表現＋有＋偶有的存在物」の構成を「所有」、「場所表現を伴わない

名詞＋有＋必然的存在物」の構成を「所在」、「（場所表現）＋有＋偶有的存在物／必然的存在物」の構成を「関係」に分類した。ここでいう「場所表現を伴わない名詞」とは、方位詞の非使用の意味に等しい。つまり、趙（2011）の分類から、方位詞使用の有無により、「有」構文の意味を細分化できることが分かった。以下のような中国語と日本語の対照文では、後置詞句の方位詞使用の有無によって、違いがみられる。

（15）树上有 8 只鸟。
（16）木の上には鳥が 8 匹いる。
（17）＊ 树有 8 只鸟。
（18）木には鳥が 8 匹いる。

後置詞句に方位詞の「上」を付けた（15）の中国語と（16）の日本語は、正しい表現である。しかし、（18）の日本語では、方位詞を付けなくても意味は同じで、正しい文として成立する。しかし、中国語では、（17）のように方位詞を付けない場合は非文となる。

（19）桌子有四条桌腿。
（20）机は脚が 4 本ある。
（21）＊ 桌子下有四条桌腿。
（22）＊ 机の下には脚が 4 本ある。

一方、後置詞句に方位詞を付けない（19）の中国語と（20）の日本語は、正しい文である。しかし、方位詞を付けると、（21）の中国語と（22）の日本語のいずれも非文となってしまう。ここで、「有」構文の方位詞の使用において、日中の揺れがあることが分かる。つまり、日本語の（16）と（18）の場合のように、方位詞の使用に関係なく、文の意味を正しく表現できる。ところが、中国語の（15）と（17）の場合では、方位詞はない（17）の文は非文となる。（19）と（21）の中国語および（20）と（22）の日本語のように、中国語と日本語の両言語共に、方位詞を付けると非文になってしまう。

各文を構成する要素の意味関係をみると、（15）と（17）の中国語および（16）と（18）の日本語の文は、ある場所に「鸟」（鳥）が存在するという意味を示す。そのため、後置詞句と「有」の動詞句の意味関係は空間属性である。このような空間属性を表すためには、「有」構

文の後置詞句は場所を示さなくてはならない。しかし、第4節で説明したように、中国語の名詞は空間的な意味が希薄である。そのため、方位詞を付けてトコロ化しなくてはならない。つまり、方位詞を付ける「有」構文は、単純に「所在」だけを意味する文ではなく、空間領属関係を説明する文なのである。一方、日本語の名詞の場合は、それ自体がトコロ性を持つため、「木」だけで空間を示すことができるし、「木の上」のように方位詞を付けて、具体的な空間的位置を表すこともできる。

また、（19）と（21）の中国語および（20）と（22）の日本語の文は、「桌子」（机）が「桌腿」（脚）を有する意味である。「桌腿」（脚）が、「桌子」（机）に付随する一部であるため、存在の意味でこれを表現することができず、領属関係でしか表せない。したがって、この場合は、後置詞句に方位詞を付けると、非文になってしまう。同様の理由で、日本語でも方位詞を付けることができない。

以上のように、「有」構文は、方位詞使用の有無によって、意味関係を「空間領属」と「所有」に2分化することができる。

７．まとめ

張（2015）『スリーステップで学ぶ中国語―文型から会話へ―』（p. 27, 46）の日本人学習者向けの初級中国語教科書では、「在」構文は存在の意味を示す「存在文」として紹介されていると同時に、「有」構文も所有の意味を表す文型として説明されている。あるいは、劉・喜多山・松田（2008）『1冊めの中国語―会話クラス―』および『1冊めの中国語―講読クラス―』（両教科書ともに p. 33）、劉（2016）『（最新版）1年生のコミュニケーション中国語』（p.29, p.33） では、「在」構文は「所在」、「有」構文は「所有」を示す文型として記述されている。そこで、両構文がどのように異なるかについて「有」構文と「在」構文の統語構造の観点から考察した。その結果は、以下のようにまとめられよう。

第１に、黄（1997）は「在」構文は空間属性を表し、「有」構文は空間および領属関係を表すと指摘したが、それらの違いに関して、構造上どのように異なるのかについては、具体的に解釈を提示していない。本稿では、両構文がそれぞれ異なる構造を持つことを明らかにした。つまり、後置詞句（PP）が動詞の「在」と共に動詞句（VP）内に位置し、動詞「在」に支配されることに対して、「有」構文では、後置詞句は動詞句外に位置し、動詞句を統御することを説明した。

第２に、先行研究（佟, 1986; 荒川; 1992; 楊・布施, 2005; 陳, 2014）が指摘したように、格を持つ言語である日本語と違い、格を持たない言語である中国語における場所を表す名詞はトコロ性が弱いく、普通名詞に方位詞を付けると、場所を表す後置詞句として表現できることが分かった。ただし、方位詞使用の有無によって、「在」構文と「有」構文の意味についてさらに分類できることを加えた。具体的には、「在」構文では、後置詞句における方位詞を付ければ、空間位置関係を示す。地名や場所を表す名詞の後に方位詞を付けなければ、空間関係を示す。一方、「有」構文では、後置詞句における方位詞を付けると、空間領属関係を意味するが、後置詞句における方位詞非使用の場合は、領属関係を表す。ここで、両構文が統語上で表す意味は同じではないという主張(丁他; 1979)を支持した。やはり、「在」構文と「有」構文は簡単に存在を表す文型であるかとか、「在」構文は「所在」で「有」構文は「所有」であるとか、言い切ることができないことが分かる。このような意味関係による区分は図７のようにまとめることができよう。

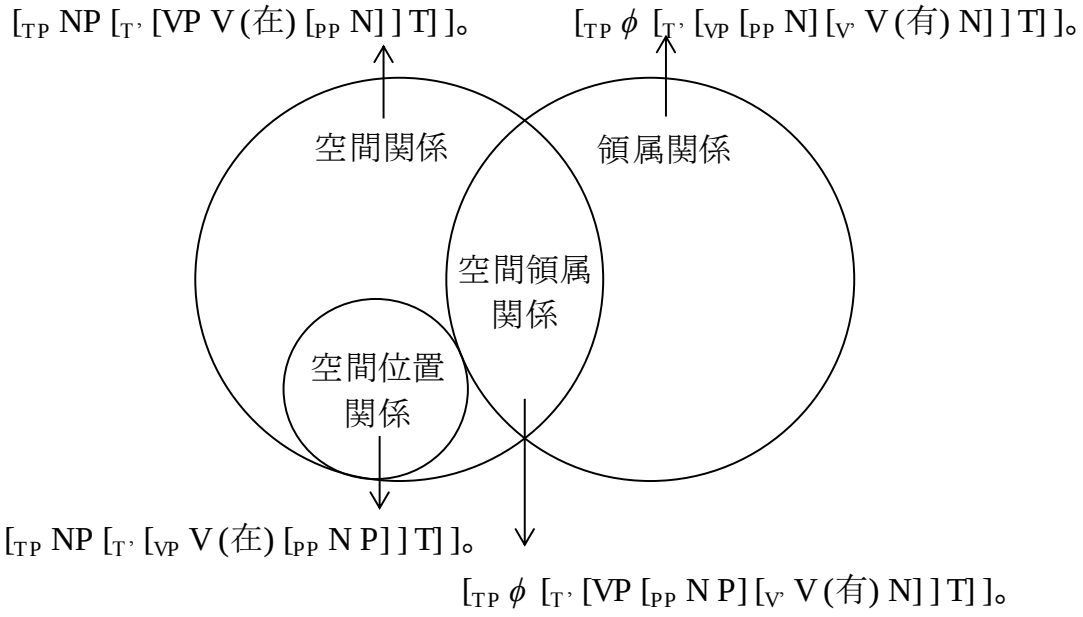


図7 「在」と「有」構文の意味による分類の図式化

図７に示したように、空間関係を表すものには、「在」構文がある。そのうち、地名以外の名詞によって構成される後置詞句に方位詞を付けると、もともと空間のみ示す関係のうえにさらに、位置関係の意味を追加できる。一方、単純に領属関係を表すも

のには、後置詞句に方位詞を付けない「有」構文がある。それに、空間関係は領属関係と重なる部分は空間領属関係であり、それは、後置詞句に方位詞を付ける「有」構文で表せることである。

このように、「在」と「有」構文を文型項目として導入する際に、「物/人物＋動詞＋場所」なのか、それとも、「場所＋動詞＋物/人物」というパッターンなのかによって、文型構造を選択し、理解させるのは不十分であると考えられる。そのため、日本人中国語学習者による習得過程に併せて、方位詞使用の有無を通して学習者に明示的に指導することで、学習者の文型習得の助けになると考えられる。

ただし、本稿では、両構文を構成する後置詞句内の名詞句における名詞の定形と不定、または有生性と無生性についての影響は考慮していない。今後の研究課題として、これらの構文における、名詞の有・無生性と定形・不定形についても検討したい。

［参考文献］

荒川清秀（1992）「日本語名詞のトコロ（空間）性―中国語との関連で―」大河内康憲（編）『日本語と中国語の対照研究論文集(上)』(pp. 71-95), くろしお出版.

荒川清秀（2004）「空間名詞と空間化」『国文学解釈と鑑賞』69(7), 32-38.

黄锦章（1997）≪汉语格系统研究—从功能主义角度看≫ 上海财经大学出版社.

鈴木重幸（1983）『日本語文法・形態論』むぎ書房.

趙萍（2011）「『所有』と『存在』の意味を表す中国語の"有"構文－場所表現を使用するか否かの観点から－」『言語と文明』9, 89-101.

張新力（2015）『スリーステップで学ぶ中国語―文型から会話へ―』三修社.

陳瑞英（2014）「中国語の方位詞『上』と日本語の『うえ』の意味と機能について―空間的用法を中心に―」『ポリグロシア』26, 79-90.

丁声树・吕叔湘・李荣・孙德宣・管燮初・傅婧・黄盛璋・陈治文（1979）≪中国语文丛书–现代汉语语法讲话≫ 中国语文杂志社（编），商务印书馆.

佟慧君（1986）≪外国人学汉语病句分析≫ 北京语言学院出版社.

方美麗（2004）「中国語と日本語の空間表現」『国文学解釈と鑑賞』69(7), 76-92.

丸尾誠（2013）『基礎から発展まで―よくわかる中国語文法』アスク出版.

楊志剛・布施英憲（2005）「中国語『場所詞』とその教授法について(その一):『存現文』

を視点にして」『藤女子大学紀要第 I 部』42, 87-101.
朱徳熙（1999）≪朱徳熙文集第 1 巻：语法讲义；语法答问；定语和状语≫ 商务印书馆.
朱徳熙（著）杉村博文・木村英樹（訳）（2000）『文法講義―朱徳熙教授の中国語文法要説』白帝社.
劉頴・喜多山幸子・松田かの子（2008）『1冊めの中国語―会話クラス―』 白水社.
劉頴・喜多山幸子・松田かの子（2008）『1冊めの中国語―講読クラス―』 白水社.
劉頴（著）・塚本慶一（監修）（2016）『（最新版）1年生のコミュニケーション中国語』白水社.